

【講義予稿】

世界遺産指定 屋久島の得失

星川 淳（作家・翻訳家 / 屋久町環境審議会会長）

本講義では、タイトルに掲げた世界遺産指定をめぐる屋久島の得失について、島外出身で定住 23 年になる文筆家という特殊な立場から私論を展開する。自然や環境関連の著書が多いとはいえ、環境分野の学問的な経歴をもつ専門家ではないため、客観的なデータ観測より生活者の主観的“感触”にもとづく報告となる点をご理解いただきたい。ただし、当然ながら屋久島で生まれ育った方々の視点とも同一ではなく、むしろ純粋な島外者でも島出身者でもないニッチ（生態学的すきま）から見えるものを伝えることが本講義の役割と考える。

まず、私自身が直接見聞した範囲を中心に、屋久島における世界自然遺産登録の背景を振り返ってみる。

私が移り住んだ頃（1982 年）、屋久島はすでに森林にかかわる二つの大きな住民運動を経験していた。明治のいわゆる「屋久島憲法」（屋久島国有林経営の大綱、1921 年）と、戦後の幅広い森林保護運動である。前者は、明治政府成立にともなって島の 95% が国有林化され、山林利用の自由が制限されすぎたために住民の激しい抵抗を引き起こしたことから、里山との境に共用林を設けたり、森林施業に地元民の雇用を優先させたりする国側の妥協策で、島民の生活安定に役立ったとされる。後者は、1964 年の霧島屋久国立公園制定にもかかわらず、ヤクスギ原生林と呼ばれる中山帯の針広混交林を中心に林野庁の大規模伐採が広がったことに島内外から危機感が高まり、1960～90 年代を通じて保護区域の追加・拡大や、自然との共生に関する議論の深まりをもたらした。

具体例を挙げれば、学術参考林、屋久杉鑑賞林、自然休養林、原生自然環境保全地域といった禁伐区域の策定に加えて、1982 年には西部瀬切川（せぎれがわ）右岸の伐採阻止と国立公園区域の見直しが実現した。世界遺産登録直前の 1990 年から 1991 年にかけても、林野庁第 6 次施業計画から南部鯛ノ川（たいのこ）源流域を含む貴重な原生林を除外する住民運動が起こり、ターゲット地域の保護に成功した。また、1980 年代には島内から「国際公園」化を模索する動きが生まれ、遺産登録を目前に鹿児島県が 1992 年から推進した「屋久島環境文化村構想」の枠組みも、島内外にまたがる広範な議論の場を提供した。さらに登録をはさんで、西部林道の全面拡幅（2 車線化）をめぐる議論が起こり、1998 年には「緑のトンネル」と呼ばれる未着工部分の計画が白紙撤回された。1993 年の世界自然遺産登録は、こうした積み重ねの上にはじめて成立したものだ。保護運動によって守られた地域のほとんどが世界遺産登録地に組み込まれたことを見ても、自然と人間社会との関係性をテーマに屋久島で培われた議論と実践が、世界遺産登録と直結していることがわかる。

付言すれば、1999 年から 2000 年にかけて隣接する種子島の離島を標的に使用済み核燃料中間貯蔵施設誘致が取り沙汰された際、周辺 1 市 3 町 1 村で核物質持込拒否条例を制定して水面下の計画を中止に追い込むことができたのも、世界自然遺産登録地としての屋久島の重みに負うところが大きい。その後、これに倣って核関連施設の立地を拒否する自治体が相次いでおり、屋久島の世界遺産登録は思わぬ副産物を生んだことになる。

1980年代に戻ると、当時の屋久島はまだまだ知る人ぞ知る存在でしかなく、もっぱら山岳登山の中上級者が大物釣りのメッカにとどまっていた。質素な暮らしを紡ぐ人里のたたくまいも、「僻地」「離島」の形容にふさわしい静けさを湛え、一步山へ入れば人跡はまれだった。いっぽう、そうした地域の時代的宿命として、高校・大学・就職で島を離れた子どもたちが再び島へ住み着くことはほとんどなく、過疎化の進行は抗えない事実であった。唯一、70年代以来の自然保護運動が脱都会派の先触れを引き寄せて、散発的ながら続く島外からの移住者の波が過疎化傾向をいくらか埋め合わせていた。正確な実数は把握していないが、私自身を含めてこれら「新島民」と呼ばれる人びとは出産・子育て段階の比較的若い世代が多かったために、島内人口の1割を超える層を形成したのではないかと。さらに、世界遺産登録後は退職世代の移住者も増え、現在は過疎化から人口漸増に転じている。

もう一つ、自然保護運動が引き寄せたのは、生態学や自然科学系の専門研究者である。屋久島に足繁く通ったり、人によっては住み着いたりして、島の持つさまざまな価値と魅力を島民とは違った角度から掘り起こし、内外に発信する役割を果たした。前述のさまざまな保護運動もほぼ例外なく、研究者たちの関与や支援をともなっていた。90年代以降は、これに社会科学、環境科学、環境技術、公共政策といった人文系・工学系の研究者も加わるようになり、地域社会と世界をつなぐ貴重な文化的・政治的フィードバックループの形成に貢献している。また、写真・映像・絵・文などを媒体とする表現者やメディアも、このようなループ形成に寄与してきた。私自身もその一端を担うわけだが、とくに島内に住む島外出身の表現者は、島民と島外者との境目に立つ特殊な視点において長短両面を併せ持つ。

移住者と研究者とを問わず島外出身者の第一の長所は、自然生態系を含む屋久島の価値を客観的に評価できる点だろう。ちなみに、1970～80年代の自然保護運動で中核を担ったUターンの人びとも、一度島外へ出たことで客観的視点を獲得し、それが愛郷精神とあいまって、独特の力を発揮しえたものと思われる。私個人に例を取れば、東京で生まれ育ち、海外での生活も経験しながら、言葉ではない生(なま)の自然に渴するような気持ちを味わったうえで屋久島に身を置いたとき、魂の奥底から洗われる心境になったことは、何にもまして強い絆を生んだ。屋久島を訪れる人の多くが、どこかでそうした自然とのつながりを求めているとすれば、すでにその体験を通過した人びとが島内にかなりの層として存在することは、活用可能な資産と考えられる。

反面、そのような島外出身者のアプローチは、厳しい生活環境と僻地・離島のさまざまなハンディにめげず逞しく生きてきた生粋の島民たちから見れば、一種の贅沢でありオリエンタリズムの匂いを漂わせる。実際、苦しい暮らしから脱け出そうと「都会並み」をめざし、子どもたちを本土の学校や就職先へ必死で送り出す島出身者の率直な気持ちは、脱都会派の心象風景とはかならずしも重ならない。ここから、島外出身者の中でも大きく分けて二つの姿勢が生ずる。一つは、できるかぎり地元の人びとに寄り添い、同化していこうとする姿勢。もう一つは、基本的に地元の文化や習慣を尊重しつつも、自分たちが身に帯びた違いは違いと認めて、むしろその異質な要素を有意義な形で地域社会に生かそうとする姿勢である。私自身は後者に属する。

こうした前提の上で、世界遺産登録の得失を評価する項目として、1) 自然環境、2) 地域社会、3) 島民の心、4) 海外を含む島外の眼 以上4つを立てて見ていこう。

1. 自然環境

国立公園をはじめとする既存の保護施策に世界遺産登録が加わったことで、生態系保護には新たな厚みが生まれた。反面、一部の観光ルートに沿って、踏み荒らしや糞尿による水系汚染が拡大した。しかし、原生自然地域とバッファゾーンの区別は、現在のところおおむね期待どおりの成果を上げているのではないかと見られる。今後の課題は、登山客・観光客の入り込みによる自然環境負荷をいかに軽減していくかだろう。また、観光ガイドブック的な“止まった自然”の姿ばかりでなく、地球温暖化その他によって激動・激変しつつある“動いている自然”を屋久島というフィールドで看取り、それを島外の世界へ伝えうるヴィヴィッドな観察眼の育成も求められる。

“動いている自然”の例としては、主に大陸由来とされる硫黄酸化物による酸性雨と、それとの関連が疑われる針葉樹の立ち枯れ増加、地球温暖化の一端と思われるサンゴの白化、同じく温暖化に関連した台風の大型化と山岳部における林道開削の相乗作用であろう森林荒廃および土壌浸食、観光ルートの多様化にともなうヤクザルとヤクジカの人馴れ拡散、タヌキに代表される移入種の広がり、などが挙げられる。地球規模の水循環システムが揺らぎはじめたことに連動して、屋久島でも近年、降雨パターンに大きな変動の兆しが見られ、生態系と地域社会におよぼす影響は予断を許さない。また、温暖化自体による動植物相の異変・変遷には、世界遺産登録地として格別の注視が必要と考えられる。

2. 地域社会

里山から海岸にかけての人里部分は、世界遺産登録以後、三つの顕著な変化をこうむった。一つは主に観光用環境整備の名目で施設や道路の建設が進んだため、里山や伝統集落が受けたネガティブな影響。二番目は逆に、そうした整備がもたらす地域社会の物理的アメニティの向上（＝都会化）。三番目は、観光客の大幅増加（登録前の三倍以上という見積りも）による屎尿やゴミ増量など、地域インフラにかかる負荷の増大である。現状では、これらが大きな齟齬を見せるに至っていないが、今後さらに意識的な調和努力が求められる。

残念なのは、人里部分の開発、いわゆる町づくりについて、「屋久島らしさ」といった意図的・戦略的な方向づけの必要性がしばしば指摘されながら、ごく一部を除いて目に見えた取り組みも成果も生まれていない点である。いっぽう、「道端のゴミが少ない」と称賛の声が多く聞かれるとおり、ゴミ分別を含めた生活環境の管理に関しては、世界遺産登録地としての自負が少なからずプラス効果をもたらしている。私自身が1998年以来、屋久町環境審議会に参加してきた経験から（99年より会長）、住民、議会、行政、ステークホルダー、専門家を有機的に巻き込んだ地域社会独自の合意形成と意思決定が、全般にいまなお未熟であることを痛感する。前述した住民運動の経験や、散発的な良策、行政・議会・住民それぞれの熱意、専門研究者を含め島外から寄せられる期待など、屋久島ならではの資産をうまく噛み合わせて生かす方法が確立できていない。地方自治体の財政難が深刻化する時代にあって、「貧すれば鈍する」道に陥らない工夫を探りたい。

他の3項とも関連するが、一つの大きな課題は、世界遺産登録を契機に基幹産業へと浮

上した観光をどう位置づけていくかだろう。「エコツアー」のような漠然とした理念で括ることはできても、その内実、地域社会との関係、経済を含む国内外情勢を背景とした屋久島での学習型・体験型観光を真に有意義なものにする鍵といった具体像を、島内で組織的に検証し、より良い姿を切り拓いていく姿勢は弱い。島内経済および行政サイドでも、これまでのところ受け身や状況後追いの対応が目立つ。大手業者による高齢者のパックツアーが入り込み観光客の大半を占めるという最近のデータも踏まえ、世界遺産の島における観光戦略を改めて練り直す時期かもしれない。

3. 島民の心

ここでも複雑な二律背反が起こっている。いっぽうでは世界遺産登録以来、屋久島の知名度や好感度の上昇による島民のプライド（郷土に対する誇り）向上が長年、離島住民として味わった被差別感を緩和しつつある。そうした知名度・好感度が多分に「屋久島オリエンタリズム」と呼びうる皮相性をともなうこととは別に、これが住民心理に与える影響は大きく、都市部の生活難ともあいまって近年、年代を問わずUターン、Iターン増加傾向をもたらし、過疎化に歯止めをかけた（現在、漸増）。その反面、島外出身者が多数を占めるガイド業や各種の学術研究に象徴されるように、地域社会が外部要素に席卷されるという不満や不安も生まれ、対照的に「屋久島ナショナリズム」と呼びうる逆差別感情がくすぶる。今後、より開かれた交流と相互理解を、伝統の継承などと調和的に進展させることが必要だ。

「屋久島オリエンタリズム」対「屋久島ナショナリズム」の摩擦や齟齬は、隠れた対立軸として注目に値するが、島民の心にもっと顕著な影響をおよぼしてきた二つの対立軸は、南北2町の伝統的な対抗意識と、1970年代以来急増したいわゆる「新島民」対「旧島民」のギャップである（後者は場合によって「屋久島オリエンタリズム」対「屋久島ナショナリズム」の軸とも重なる）。いずれも人類史の定番といえるほど自然なものだけに、手早く解消する妙薬はない。とはいえ、これら3軸がこじれると、たとえば良心的な研究者が外来語を使っただけで排除されるといった過剰反応も招く。屋久島が引き寄せてきた幅広い人材や資産を活用するためには、こうした不毛な対立や摩擦を乗り越える工夫が求められる。人間社会のあらゆる対立と同様、触れ合いの機会を増やし、互いを知り合うことが、より良い共働につながるだろう。世界遺産登録は本来、島民意識の一体化を促す枠組みだったし、懸案の2町合併の成否も3軸の行方に関連してきそうだ。

4. 島外の眼

世界遺産登録がもたらした最大の変化は、主にメディアを通じた屋久島の露出度激増だろう。そこからは「自然の聖地」「環境のメッカ」といった神格化めいたイメージが生まれ、屋久島に対する憧れやポジティブな先入観を抱いて訪れる人が多い。それらのイメージは環境保護に一定の寄与をする反面、縄文杉への一極集中に代表される「木を見て森を見ず」の傾向や、あらかじめかけた色メガネのまま自然のうわべをなでて帰る「癒し系」観光の傾向も増長している。今後の課題は、多様性を宿す屋久島の自然生態系をありのままに見つめること、そうした自然と共生するための伝統的・現代的な知恵を自分の頭と体で学ぶことなど、より深みのある体験促進ではないか。

その際、皮相性を帯びた「屋久島オリエンタリズム」を指弾したり排除したりするだけでは建設的ではない。私自身の経験に照らしても、都市部で生まれ育った人間（都市化の広がりからして現代人の大半？）が自然に出会うとき、カッコつきの「自然」、つまりなんらかのイメージを投影された自然を入り口にする場合が圧倒的に多い。メディアのまなざしも同様である。だとすれば、最初にかけた色メガネを段階的にはずしていくこと、あるいは暗闇に目を慣らすように、裸眼でありのままの自然に目を慣らすこと、そしてそれができるだけの時間をかけることに留意したい。島外の人びとにとっては、もっと長く滞在したり、リピーターになったりすることを意味するだろうし、島民にとっては「ノー」と言うべきときは言う厳しさと、植物の芽吹きを待つような優しさの両方を求められることになるだろう。さらにその関係は一方通行ではなく、かならず双方向の学び合いがあるはずだ。島民にとって、国内外からたくさんの目が注がれていることは、さまざまな意味でかけがえのない財産なのだから。世界遺産登録は、屋久島をこうした多層多様な学び合いの場にする触媒であってほしい。